



TITLE:

花山だより(一月)

AUTHOR(S):

星見山人

CITATION:

星見山人. 花山だより(一月). 天界 1935, 15(167): 174-174

ISSUE DATE:

1935-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166981>

RIGHT:

花 山 だ よ り (一月)

臺灣へ御出張申だつた山本先生は、歸航の船が遅れた爲め1934年12月31日23時57分に御歸宅になつた。正に3分間の餘裕を残して豫定通り昨年末に歸られた事になる。そして引續き元旦、二日と先生は山へ來られる御精勤振りである。正月の休みで臺員の多數は休暇をとつたが、柴田先生は休暇をとられず御精勤。小山先生は新星觀測のため休暇中も夜間は山へ來られる。又た公文、龜井、是澤の諸氏も暮から正月にかけて、留守番として山に残られた。

臺長保管の18輦對物プリズムが18輦赤道儀に取付けられ、今月初めから新星の立派な分光寫眞が、柴田先生に依つて毎朝夕撮影せられてゐる。又た小山先生も新星の變光狀態を寫眞撮影されてゐるが、同星の比較星が近くに適當なのがない爲め、大いに苦心され、同一乾板に暴寫時間を倍づゝにした新星と、他の星を同様にして寫した星像とから光度を求める方法を採用されてゐる。尙ほ此の方法は静岡縣の清水氏にも、同先生から教へられ、撮影を依頼せられたので、清水氏からも此の最も有效な觀測方法に依る寫眞が、小山先生の所へ送られつゝある。

12日は神戸六甲星見臺開臺式參列の序もあり、途中大阪見物をしやうと、朝9時京都發にて山本、柴田、稻葉、池田、高城の五氏は先づ大阪城を見物。城内陳列の舊幕時代の望遠鏡等見學。午後より大阪朝日新聞社を見學、スピード印刷に驚歎する。此處にて一先づ自由解散、神戸星見臺開臺式への參列者は山本先生夫妻、柴田、小山、稻葉の諸氏。

19日は月食があるので微光星掩蔽觀測に、公文、高城兩氏は神戸星見臺へ出張、花山では山本臺長を始め總がかりで觀測。新聞記者、寫眞班等20名許り押寄せて大變な騒ぎであつた。雲に惱まされはしたが大體無事に觀測。

28日には東北帝大の田中館先生來臺、幻燈使用で火山や氷河に就いて講演せられ、終つて一同を三島亭に招待された。此處でも御持參の幻燈機械でパナマや南米の旅行談をせられ、22時の列車で東京へ出發された。

新城先生が今度上海自然科學研究所の長として赴任せられるに就き、送別會を30日夕三島亭に開く、出席者25名の盛會であつた。龜井壽彦氏は2ヶ年8ヶ月の長い間花山に暮し、主として太陽や氣象の觀測に従事してゐられたが今度御家庭の都合で歸郷される事になり31日花山を去られた。(星見山人)